



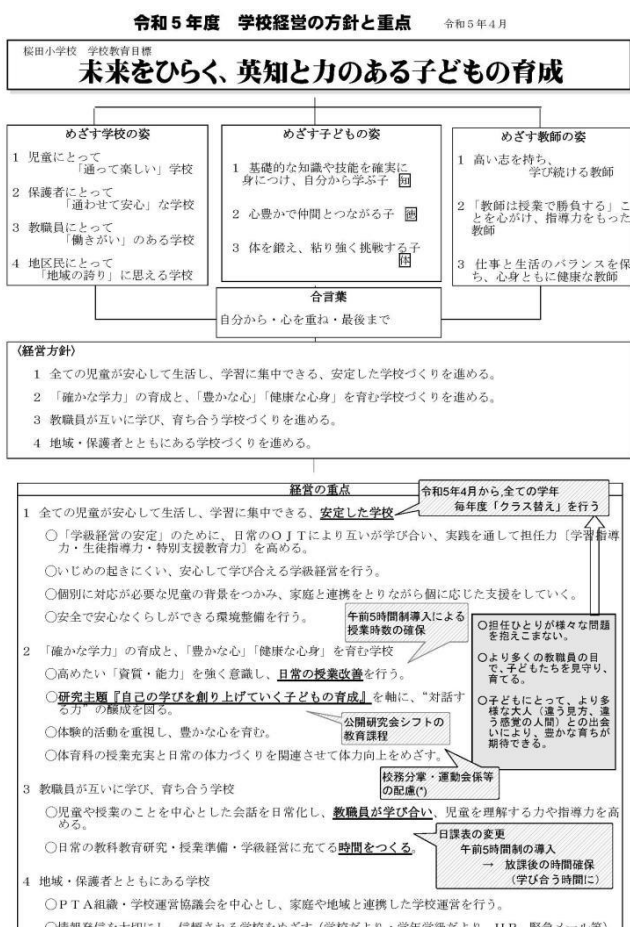
自己の学びを創り上げていく子どもの育成 ～個別最適な研究で「対話」を探る～

山形市立桜田小学校 阿部 勉

1 はじめに

令和2年度に山形市教育委員会から委嘱を受け、コロナ禍を経て、今年度（令和5年度）公開となった。「やらなきゃならないんだから、楽しくやろうね。」そんな言葉が校内で行き交うも、校長としての内情はとても苦しかった。研究の詳細については研究主任の原稿「研究所報」に譲り、本稿では、校長としてのささやかな取り組みや葛藤を綴る。

2 学校経営の安定のために



子どもたちを伸ばす「授業づくり」は、安定した教職員、安定した学年・学級、安定した保護者との関係が大前提である。令和2年4月に教頭と

して着任した私は、様々なトラブル事案や保護者対応、教職員との話し合いを通して、そのことを改めて思い知った。令和3年4月から校長職を拝命し、「より安定した学校づくり」のために策を練った。

(1) 単年度でクラス替え

様々な家庭環境やこれまでの学校での育ち等を背景に、指導が困難な児童が多く見られるようになり、担任の心理的負担は非常に大きくなっている。ふとしたことから保護者との関係が悪化し、修復が難しくなる事案も散見され、2年間同じクラスを受け持つとなると、精神の不調にもつながりかねないと危惧した。

本校（学年で3学級ずつ）では、3年生から4年生、5年生から6年生に学年が進む際は、クラス替えなしの持ち上がりとしていたが、上記のリスクを回避すべく、すべての学年、単年度でクラス替えをし、担任も持ち上がりとは限らないと明確に示した。（令和4年4月に保護者へ予告。令和5年4月から実施。）

(2) 午前5時間制の導入

放課後の私たちの研修時間を確保し、子どもたちを伸ばす「子ども理解」や「授業準備」等が充実すると価値付けし、実施にこぎ着けた。（令和4年10月に保護者へ予告。保護者からご意見をちょうだいし、試行期間を経て、令和5年4月から実施。）

3 研究の実際

研究主題

自己の学びを創り上げていく子どもの育成
～個別最適な研究で「対話」を探る～

(1) 4年間の研究の軌跡

〔令和2年度〕

コロナウイルス感染症拡大。「休校」からのスタート。学校授業再開は6月。2ヶ月の遅れを取り

戻すべく、“学習進度優先”で、どんどん授業を進めることにした。“グループ活動制限”“合唱等声を出すことの制限”など、子どもたちの活動は大きく制限された。「関わり合う」ことを研究しようとしていた本校では、コロナ禍での制限は痛手。研究への取り組みは緩やかなものに。

〔令和3年度〕

通常の学校生活はまだまだ。多くの制限が続く。「対話」を焦点にした授業研究は続く（教室に多人数の参観者が入れない状況のため、リモート配信でお互いの授業を見合う）。外部からの講師を招くことは難しく、数少ない実施。山形大学の三浦登志一教授と森田智幸准教授から、これからの授業づくりへの助言をいただく。他校の先生からも講師として助言をいただく。他校の授業参観から学ぶことはできず。

〔令和4年度〕

委嘱3年目の令和4年4月が大きな転機となった。「より自分事として校内研究と向き合いたい。それぞれの教師の経験に応じ、今求めているものとなるべく軌を一にした研究を行いたい。」—そんな願いから、舵を切り直した。「研究教科」を絞らず、担任としてやりたい教科を窓口にした授業研究を行うことにしたのである。研究を束ねる意味で焦点を定めたのが「対話」。公開を次年度に控えた段階に来ての舵切りは、職員間でも不安があったが、「個別最適」の言葉に後押しされ、研究主任の強いリーダーシップのもと、進めることにした。

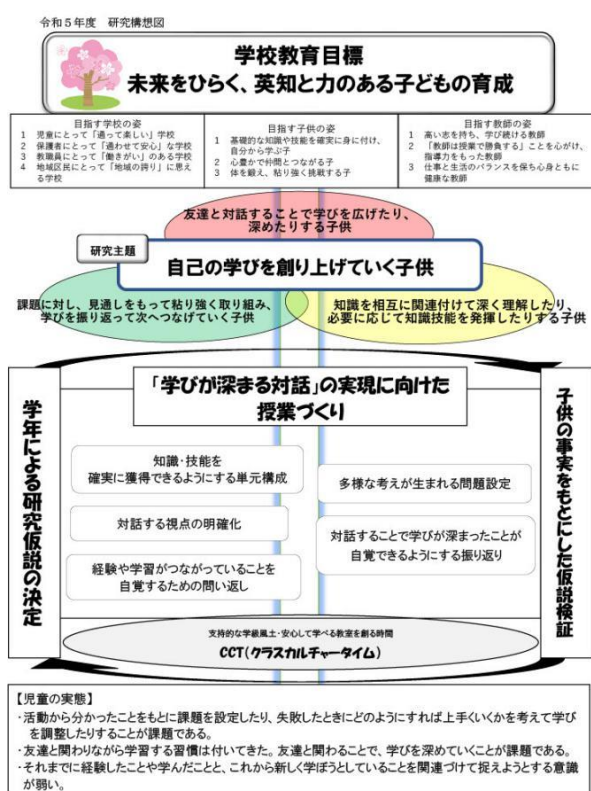
制限はあるものの、通常の学校生活に戻りつつある年度となる。校内でお互いの授業公開の他に、外部講師を招いて、研修会を重ねた。

- ①佐藤節子先生（県スクールカウンセラー）からは、学びを支える温かい学級風土づくりについて、演習を通して学んだ。毎回のCCT（後述）に生かされている。
- ②花輪敏男先生（FR教育臨床研究所所長）からは特別支援教育力の向上に対して激励を受けた。「気になるお子さんはたくさんいるのだ。担任が特別支援教育の知識をもち、対応力を身に付けることが極めて大事だ。」
- ③古山茂満先生（元山市教育長）からは授業づくりに立ち向かう心を学んだ。「下手な教師の授業のせいで体育嫌いがつくられる。これは体育に限ったことではない。子どもの事実は、教師の指導力と直結しているのだ。」
- ④三上英司先生（山形大学教授）からは国語科を窓口にして「対話」等について学んだ。「自分の考えをもてる子どもに育てる。他者の言葉に耳

を傾ける力を小学校で。言葉にして伝え、相手の反応を見つめることで自分を見つめ直す、そのような対話を。教育活動の準備時間を確保することが大事で、それは校長の責務だ。」—経験や年代により、その受け止め方は様々。教えをこみしめながら、教師としての暮らし、学び、実践を刻んできた。

〔令和5年度〕

5月連休明けからは通常の学校生活に戻る。外部へ出かけていくことも大幅に制限が緩和され、他校へ出かけ、参観した実践から学んだ者がそれを還元し、授業づくりに生かしている。以下の研究構想図をもとに、1学期中に一人一授業公開を重ねた。そして、10月4日の公開研究発表会。



(2) 学級経営 ～私たちの意識を言語化する～

お互いの授業の参観だけでなく、令和3年度から「土台となる学級づくり」にも焦点を当てよ

うと、『研究だより～TEAM SAKURADA～』を通して、学級づくりで大切にしていることなどをお互いに発信することを始めた。学級の中で自分が何気なく行っている立ち居振る舞いが、どのような思いからきているのか、子どもたちにどう影響しているのかなど、自分を振り返って言語化する。これは少々骨の折れることだが、省察してよりよいものを求めるきっかけにもなった。私たちはそれを読んで学び、自分の実践に結び付けていった。

(3) 教師が学び合う学校づくり

『研究だより』にプラスし、『ラウンドスタディ』方式による私たち教師の対話の活性化と、『学びカフェ』と称したこの指止まれ方式の学習会が生まれた。これまでの教師としての育ちが違う者同士が、互いの考えを出し合い、時にはぶつかり合って自己更新していく、その繰り返しがなされている。『自由進度学習』の試行実践も始まっている。研究主任がリードし、それに呼応して挑戦してみようとする雰囲気職員室に流れ、嬉しく、そして、頼もしくてならない。

(4) CCT (クラスカルチャータイム)

安心して学ぶことができる教室をつくるため、お互いを認め合うあたたかい学級風土をつくるために、令和4年度から本格的に取り組んでいる。それ以前は“さくらタイム”というスピーチ活動で、お互いを分かり合う素地づくりを行ってきた。そのスピーチ活動も含めて、更にお互いが仲良くなれるよう“構成的グループエンカウンター”などを行っている時間が「CCT」である。週に一度、学級の実態に合わせ、各担任が内容を工夫して実践している。



4 校内研究のねらい

(1) 「オレ、勉強、がんばる！」

～やる気を引き出す授業～

ある朝、校門で子どもたちを迎えている私に、

話しかけてくれる子がいた。「校長先生、オレ、最近けんかしないんだ。」と。よくけんかしては担任の先生と話し込んでいる子だったので、「へえ、どうしてだろうね。」と聞き返すと、「うん、勉強、がんばってるんだ。オレ、勉強がんばる。」と、はつらつと玄関に入っていったのだった。とっても嬉しくなった。ふと頭をよぎったのは、校内研究のこと。ちょうどその頃、研究授業のために事前研がもたれ、単元計画がかたまり、計画に沿って毎時間の授業が工夫され、先生方に観てもらうための1時間に向けて、日々の授業が充実していたのだった。

子どもが毎日登校し、ほとんどの時間を過ごす教室において、「勉強分かる。楽しい。オレ、もっとがんばる。」と言わしめる授業が積み重なる。そんな充実した授業を創っていくことこそが私たちの使命なのだなあと、そのけんかっ早い子の背中を見つめながら思うのであった。



(2) 「霧の中をゆけば 衣 自ずと濡れる」

校内研究の究極のねらいは「教師個人の担任力（学習指導力・生徒指導力・特別支援教育力）の向上」なのではないかと考えている。教師の力量が子どもの資質・能力育成に直接関わってくることは周知の事実である。チームスポーツと同じように、個の力が高まらなければ学校全体としての力は高まらない。また、学校全体の学び合う雰囲気が、個々の学びに影響していく。お互いが影響し合って全体が高まっていく、全体が高まって個の力が伸びる — そのような、全体と個が往還する“学び合う学校づくり”を目指しながらの日々が、これからも続く。

人は、急には変わらないもの。学んだことや人から影響を受けながら、じわりじわりと成長していくもの。そのことを思うとき、前山形市教育長荒澤賢雄氏の言葉が時折胸の中によみがえり、口元で反芻している。—「霧の中をゆけば 衣 自ずと濡れる よき人と交われば よき人となる」— 職員室が学び合おうという空気に包まれることで、

そこに暮らす私たちが知らず知らず“よき人”になれることを信じながら暮らしている。



5 私たちの研究の今後

(1) コロナ禍でのゆとり？

コロナ禍、外部の活動（PTA活動含む）が何もなく3年間（令和2年度～4年度）は、校内で力をためた。特に令和2年度の始まりは「休校」により子どもたちがいない中での職員会議と年間の見通しによる授業準備の時間があった。

「我々新たなメンバーが、こういう、じっくりと語り合える時間の中で、お互いを知り、刺激し合い、授業の準備ができるって、いいね！」という言葉が行き交った。あの頃は“感染拡大防止”に必死であったが、単元づくりを考える意味ではゆとりがあったのかもしれないと、今になって思う。

(2) 経験したことがないことへの不安との葛藤

令和5年度がはじまり、コロナ禍が収束に向かい、いよいよ半年後に公開研が迫ってくると、以前から「大変だ。大変だ。」と、見たことも聞いたこともない「公開研」に不安を抱いていた職員が、とうとう悲鳴を上げた。職員総出でカバーした。非常に辛いものがあり、支える職員たちの疲労の色は濃く、それは年度末まで続く。他職員がまた疲労で悲鳴を上げることになる。

世の中はコロナ禍以前に戻ろうとする動きがあった。校長として「以前と同じにはできない」と、公開研究会も盾にして保護者に再三呼びかけた。育児や病気のために休んでいる職員のこと、代わりの者が入ってこない現状、体調不良者のことなど窮状を語り、カバーする職員の疲労も伝え、「休日の十分な休みを含めた職員の体調管理と、授業準備に専念したいのだ」と訴えてきたが、保護者役員には理解してもらえず、PTA活動が復活した。夜の会議、休日の学年親子行事や資源回収、学級懇談会等々。休日の活動は校長と教頭が対応し、職員には休んでもらうことも行った。コロナ

禍で過ごしてきた職員（特にその近辺で採用され、育った若い職員）は戸惑った。「えっ、そんなのも出なきゃならないのですか。仕事ですか。振替はどうしてくれるのですか？」等々。学級懇談会に際しても、「やったことがなくて、何をどうすればいいのか分からない。とっても不安。」と。

(3) やれることを、やれる範囲で

公開研究日に向けて、令和4年度当初に「授業者は各学年から1名」と研究主任と言葉を交わしたことがあった。が、それは、職員数の減少（臨時職員多数）と「公開研」の见えない恐怖におびえる職員の不安を払拭できないままであることから、「学年部から1名」へと変更していった。

体調不良の職員は授業者から外し、代わりとなる授業者も立てなかった。コロナ禍前の公開研を知る職員からは少々不満の声が上がった。－これで市の委嘱を受けての大々的な取り組みと言えるのか－と。大業に構えずに、やってきたことの発表、研究途上の私たちと子どもたちの姿を見ていただく、やれる範囲でいいよと、割り切った。

(4) 「一斉公開日」が終わり、新たな研究会へ

次年度から、山形市の委嘱研究の在り方が変わる。今年度が「市内一斉公開研究日」の最終年度となる。公開研を経験した者が自身の“武勇伝”を語り、さもそれが美德であり後輩にも求めようとする雰囲気を醸し出し、若者から恐怖として受け止められた「市内一斉公開研」。これが終わった。一つの時代は、終わった。

今年度行われている「若手育成授業研究会」は“この指止まれ”のようなもの。今後このような研究会が軌道に乗り、経験に応じて自分が求める研究、自発的に授業を発信してみようとする教員が出てくる研究になっていくことを信じている。

6 おわりに

もがき苦しんだ軌跡を記すことにも意味があるのではないかと、終盤は内情を吐露する形で書いた。小学校教員になろうとする若者の“情熱”は信じたい。が、もはや、教員の情熱に頼りすぎた学校運営、学校研究はできないと考えている。市教委の委嘱研究変革への英断に感謝である。

日常の職員室が気楽に学級づくり（＝授業づくり）について語り合う場となること、学びの意欲に応じた研究会「この指止まれ」が身近にあること。これが校内研究の楽しさにつながっていく。あれっ、求めるものは、私が教員として育ってきた昔と同じじゃないか。